

花のき村と盗人たちぬすびと

新美にいみ 南吉なんきち

一

むかし、花のき村に、五人組の盗人ぬすびとがやってきました。

それは、若竹わかたけが、あちこちの空に、かぼそく、うい
ういしい緑色の芽をのぼしている初夏のひるで、松林
では松蟬まつせみが、ジイジイジイと鳴いていました。

盗人たちは、北から川にそってやってきました。花
のき村の入口のあたりは、すかんぽやうまごやしの生
えた緑の野原で、子どもや牛が遊んでおりました。こ
れだけを見ても、この村が平和な村であることが、盗
人たちにはわかりました。そして、こんな村には、お
金やいい着物を持った家があるにちがいないと、もう

喜んだのでありました。

川は藪やぶの下を流れ、そこにかかっている一つの水車
をゴトンゴトンとまわして、村の奥深くおくふかはいつていき
ました。

藪のところまでくると、盗人のうちのかしらが、い
いました。

「それでは、わしはこの藪やぶのかげで待っているから、
おまえらは、村のなかへはいつていつて様子ようすをみてこ
い。なにぶん、おまえらは盗人ぬすびとになつたばかりだか
ら、へまをしないように気をつけるんだぞ。金のあり
そうな家を見たら、その家のどの窓まどがやぶれそう
か、その家に犬がいるかどうか、よつくしらべるの
だぞ。いいか釜右工門かまえもん。」

「へえ。」

と釜右工門が答えました。これは昨日きのうまで旅あるきの
釜師かましで、釜や茶釜をつくっていたのでありました。

「いいか、海老之丞えびのじょう。」

「へえ。」

と海老之丞が答えました。これは昨日きのうまで錠前屋じょうまえやで、

家々の倉や長持などの錠をつくっていたのでありませんた。

「いいか角兵工。」

「へえ。」

とまだ少年の角兵工が答えました。これは越後からきた角兵工獅子で、昨日までは、家々の鬨の外で、さか立ちしたり、とんぼがえりをうったりして、一文二文の銭をもらっていたのでありました。

「いいか鮑太郎。」

「へえ。」

と鮑太郎が答えました。これは、江戸からきた大工の息子で、昨日までは諸国のお寺や神社の門などのつくりをみてまわり、大工の修業していたのでありました。

「さあ、みんな、いけ。わしは親方だから、ここで一服すいながらまっています。」

そこで盗人の弟子たちが、釜右工門は釜師のふりをし、海老之丞は錠前屋のふりをし、角兵工は獅子まい

のように笛をヒヤラヒヤラ鳴らし、鮑太郎は大工のふりをして、花のき村にはいりこんでいきました。

かしらは弟子どもがいつてしまうと、どっかと川ばたの草の上に腰をおろし、弟子どもに話したとおり、たばこをスッパ、スッパとすいながら、盗人のような顔つきをしていました。これは、ずっとまえから火つけや盗人をしてきたほんとうの盗人でありました。

「わしも昨日までは、ひとりぼっちの盗人であったが、今日は、はじめて盗人の親方というものになつてしまった。だが、親方になつてみると、これはなかなかいいもんだわい。仕事は弟子どもがしてくれから、こうしてねころんで待つておればいいわけである。」

とかしらは、することがないので、そんなつまらないひとりごとをいつてみたりしていました。

やがて弟子の釜右工門がもどってきました。

「おかしら、おかしら。」

かしらは、ぴよこんとあざみの花のそばから体を起こしました。

「えいくそツ、びつくりした。おかしらなどとよぶんじゃねえ、魚の頭のように聞こえるじゃねえか。ただかしらといえ。」

盗人になりたての弟子は、

「まことにあいすみません。」
とあやまりました。

「どうだ、村の中の様子は。」
とかしらがききました。

「へえ、すばらしいですよ、かしら。ありました、ありました。」

「何が。」

「大きい家がありましたね、その飯炊釜は、まず三斗ぐらいはたける大釜でした。あれはえらい銭になります。それから、お寺につつてあつた鐘も、なかなか大きなもので、あれをつぶせば、まず茶釜が五十はできます。なあに、あつしの眼にくるいはありません。嘘だと思ふなら、あつしがつくつてみせましょう。」

「ばかばかしいことにいばるのはやめろ。」
とかしらは弟子をしっかりとつけました。

「きさまは、まだ釜師根性がぬけんからだめだ。そんな飯炊釜やつり鐘などばかりみてくるやつがあるか。それになんだ、その手に持っている、穴のあいた鍋は。」

「へえ、これは、その、ある家の前を通りますと、槇の木の生垣にこれにかけて干してありました。みるとこの、尻に穴があいていたのです。それをみたら、じぶんが盗人であることをついわすれてしまって、この鍋、二十文でなおしましょう、とそこのおかみさんにいってしまったのです。」

「なんとというまぬけだ。じぶんのしょうばいは盗人だということをしつかり肚にいれておらんから、そんなことだ。」
と、かしらはかしららしく、弟子に教えました。そして、

「もういっぺん、村にもぐりこんで、しっかりとみなおしてこい。」

と命じました。釜右工門は、穴のあいた鍋をぶらんぶらんとふりながら、また村にはいっていきました。

「こんどは海老之丞がもどつてきました。」

「かしら、ここの村はこりやだめですね。」

と海老之丞は力なくいいました。

「どうして。」

「どの倉にも、錠らしい錠は、ついておりません。」

子どもでもねじきれそうな錠が、ついておるだけで

す。あれじゃ、こつちのしょうばいにやなりません。

ん。」

「こつちのしょうばいというのはなんだ。」

「へえ、……錠前……屋。」

「きさまもまだ根性がかわつておらんツ。」

とかしらはどなりつけました。

「へえ、あいすみません。」

「そういう村こそ、こつちのしょうばいになるじやな

いかツ。倉があつて、子どもでもねじきれそうな錠し

かついておらんといいほど、こつちのしょうばいに都

合のよいことがあるか。まぬけめが。もういっぺん、

みなおしてこい。」

「なるほどね。こういう村こそしょうばいになるので
すね。」

と海老之丞は、感心しながら、また村にはいつていき
ました。

つぎにかえつてきたのは、少年の角兵エでありまし

た。角兵エは、笛をふきながらきたので、まだ藪の向

こうで姿のみえないうちから、わかりました。

「いつまで、ヒヤラヒヤラと鳴らしておるのか。盗人

はなるべく音をたてぬようにしておるものだ。」

とかしらはしかりました。角兵エはふくのをやめまし

た。

「それで、きさまは何をみてきたのか。」

「川についてどんどんいきましたら、花菖蒲を庭いち

めんにかかせた小さい家がありました。」

「うん、それから？」

「その家の軒下に、頭の毛も眉毛もあごひげもまつし

ろなじいさんがいました。」

「うん、そのじいさんが、小判の入った壺でも縁の下

にかくしていそうな様子だったか。」

「そのおじいさんが竹笛たけがえをふいておりました。ちよつとした、つまらない竹笛だが、とてもええ音がしておりました。あんな、ふしぎに美しい音ははじめてききました。おれがききとれていたら、じいさんはにこにこしながら、三つ長い曲をきかしてくれました。おれは、お札に、とんぼがえりを七へん、つづけざまにやつてみせました。」

「やれやれだ。それから？」

「おれが、その笛はいい笛だといったら、笛竹の生えている竹藪たけやぶを教えてくださいました。その竹で作った笛だそうです。それで、おじいさんの教えてくださいました竹藪へいってみました。ほんとうにええ笛竹が、何百すじも、すいすいと生えておりました。」

「むかし、竹の中から、金の光がさしたという話があるが、どうだ、小判こばんでも落ちていたか。」

「それから、また川をどんどんくだつていくと小さい尼寺あまでらがありました。そこで花の撓たうがありました。お庭にいっぱい人がいて、おれの笛ふえくらいのおおきさのおお積しやか迦かさまに、あま茶の湯をかけておりました。おれも

いっぱいかけて、それからいっぱい飲ましてもらつてきました。茶わんがあるならかしらにも持つてきてあげましたのに。」

「やれやれ、何という罪のねえ盗人ぬすびとだ。そういう人ごみの中では、人のふところや袂たもとに気をつけるものだ。とんまめが、もういつペンきさまもやりなおしてこい。その笛はここへおいていけ。」

角兵かくべえエはしかられて、笛を草の中へおき、また村にはいっていきました。

おしまいに帰つてきたのは鉦かね太郎なたろうでした。

「きさまも、ろくなものはみてこなかつたろう。」
と、きかないさきから、かしらがいいました。

「いや、金持がありました、金持が。」

と鉦太郎は声はずませていいました。金持ときいて、かしらはにこにこしました。

「おお、金持か。」

「金持です、金持です。すばらしいりっぱな家でした。」

「うむ。」

「その座敷ざしきの天井てんじょうときたら、さつま杉の一枚板まいいたなん
で、こんなのをみたら、うちの親父おやじはどんなに喜ぶか
も知れない、と思って、あつしはみとれていまし
た。」

「へっ、おもしろくもねえ。それで、その天井をはず
してでもくる気かい。」

鮑太郎かんたろうは、じぶんが盗人ぬすびとの弟子でしであったことを思
い出しました。盗人の弟子としては、あまり気がきか
なかったことがわかり、鮑太郎はバツのわるい顔をし
てうつむいてしまいました。

そこで鮑太郎も、もういちどやりなおしに村にはい
っていきました。

「やれやれだ。」
と、ひとりになったかしらは、草の中へあおむけにひ
っくりかえっていいました。

「盗人のかしらというのもあんがい楽なしようばい
ではないで。」

とつぜん、

「ぬすとだッ。」

「ぬすとだッ。」

「そら、やつちまえッ。」

という、おおぜいの子どもの声がしました。子ども
声でも、こういうことを聞いては、盗人としてびつ
りしないわけにはいかないので、かしらはひよこんと
とびあがりました。そして、川にとびこんで向こう岸
へ逃げようか、藪やぶの中にもぐりこんで、姿すがたをくらま
そうか、と、とつさのあいだに考えたのであります。

しかし子どもたちは、縄切なわきれや、おもちゃの十手をふ
りまわしながら、あちらへ走っていきました。子ども
たちは盗人ぬすびとごっこをしていたのでした。

「なんだ、子どもたちの遊びごとか。」
とかしらははりあいがぬけていいました。

「遊びごとにしても、盗人ごっこはよくない遊び
だ。いまだきの子どもはろくなことをしなくなつた。
あれじゃ、さきが思いやられる。」

じぶんが盗人のくせに、かしらはそんなひとりごとをいいながら、また草の中にねころがるうとしたのでありました。そのときうしろから、

「おじさん。」

と声をかけられました。ふりかえってみると、七歳くらいのかわいらしい男の子が牛の仔をつれて立っていました。顔だちの品のいいところや、手足の白いところを見ると、百姓の子どもとは思われません。

旦那衆の坊ちゃんが、下男について野あそびにきて、下男にせがんで仔牛を持たせてもらったのかもしれない。だがおかしいのは、遠くへでもいく人のように、白い小さい足に、小さい草鞋をはいていることでした。

「この牛、持っていてね。」

かしらが何もいわないさきに、子どもはそういつて、ついとそばにきて、赤い手綱をかしらの手にあずけました。

かしらはそこで、何かいおうとして口をもぐもぐやりましたが、まだいい出さないうちに子どもは、あち

らの子どもたちのあとを追って走って行ってしまいました。あの子どもたちの仲間になるために、この草鞋をはいた子どもはあとをもみずにいってしまいました。

ぼけんとしているあいだに牛の仔を持たされてしまったかしらは、くつくつと笑いながら牛の仔をみました。

たいてい牛の仔というものは、そこらをびよんぴよんはねまわって、持っているのがやっかいなものです。が、この牛の仔はまたたいそうおとなしく、ぬれたうるんだ大きな眼をしばたたきながら、かしらのそばに無心に立っているのです。

「くつくつくつ。」

とかしらは、笑いが腹の中からこみあげてくるのが、とまりませんでした。

「これで弟子たちに自慢ができるて。きさまたちがばかづらさげて、村の中をあるいているあいだに、わたしはもう牛の仔をいっぴきぬすんだ、といつて。」

そしてまた、くつくつくつと笑いしました。あんまり笑ったので、こんどは涙なみだが出てきました。

「ああ、おかしい。あんまり笑ったんで涙が出てきやがった。」

ところが、その涙が、流れて流れてとまらないのでありました。

「いや、はや、これはどうしたことだい、わしが涙を流すなんて、これじゃ、まるでないのと同じじゃないか。」

そうです。ほんとうに、盗人ぬすびとのかしらはなっていたのであります。——かしらは嬉うれしかったのです。じぶんはいままで、人から冷たい眼めでばかりみられてきました。じぶんが通ると、人びとはそら変なやつがきたといわんばかりに、窓まどをしめたり、すだれをおろしたりしました。じぶんが声をかけると、笑いながら話しあっていた人たちも、きゆうに仕事のことを思い出したように向こうをむいてしまうのであります。池の面おもてに浮かんでいる鯉こいでさえも、じぶんが岸に立つと、がばつと体たいをひるがえしてしずんでいくのであり

ました。あるときさるまわしの背せなか中に負われているさに、柿かきの実をくれてやったら、一口もたべずに地べたにすててしまいました。みんながじぶんをきらっていたのです。みんながじぶんを信用してはくれなかつたのです。ところが、この草鞋わらじをはいた子どもは、盗人であるじぶんに牛の仔こをあずけてくれました。またこの仔牛も、じぶんをちつともいやがらず、おとなしくしております。じぶんが母牛でもあるかのように、そばにすりよっています。子どもも仔牛も、じぶんを信用しているのです。こんなことは、盗人ぬすびとのじぶんには、はじめてのことであります。人に信用されるといふのは、なんとといううれしいことでありましょう。：

そこで、かしらはいま、美しい心になっているのであります。子どもころにはそういう心になつたことがありませんでしたが、あれから長いあいだ、わるいきたない心でずっといたのです。久しぶりでかしらは美しい心になりました。これはちようど、あかまみれのき

たない着物を、きゆうに晴着はれぎにきせかえられたように、奇妙きみょうなぐあいでありました。

——かしらの眼めから涙なみだが流れてとまらないのはそういうわけなのでした。

やがて夕方になりました。松蟬まつげみは鳴きやみました。村からは白い夕もやがひっそりと流れだして、野の上にひろがっていきました。子どもたちは遠くへいき、「もういいかい」「まあだだよ」という声が、ほかのもの音とまじりあつて、ききわけにくくなりました。

かしらは、もうあの子どもが帰ってくるじぶんだと思つて待っていました。あの子どもがきたら、「おいしよ。」と、盗人ぬすびとと思われぬよう、こころよく仔牛こうしをかえしてやろう、と考えていました。

だが、子どもたちの声は、村の中へ消えていってしまいました。草鞋わらじの子どもは帰つてきませんでした。村の上にかかつていた月が、かがみ職人しよくにんのみがいたばかりの鏡のように、ひかりはじめました。あちらの森でふくろうが、二声ずつくぎつて鳴きはじめました。

仔牛こうしはお腹なかがすいてきたのか、からだをかしらにすりよせました。

「だって、しようがねえよ。わしからは乳は出ねえよ。」

そういつてかしらは、仔牛のぶちの背中せなかをなでていました。まだ眼めから涙なみだが出ていました。

そこへ四人の弟子でしがいつしよに帰つてきました。

三

「かしら、ただいまもどりました。おや、この仔牛はどうしたのですか。ははア、やっぱりかしらはただの盗人ぬすびとじゃない。おれたちが村をさぐりにいつていたあいだに、もうひと仕事しちやつたのだね。」

釜右エ門かまえもんが仔牛をみていました。かしらは涙にぬれた顔を見られまいとして横をむいたまま、

「うむ、そういつてきさまたちに自慢しようと思つていたんだが、じつはそうじゃねえのだ。これにはわけがあるのだ。」
といました。

「おや、かしら、涙……じゃございませんか。」
と海老之丞が声を落としてききました。

「この、涙てものは、出はじめると出るもんだな。」
といて、かしらは袖で眼をこすりました。

「かしら、喜んでくだせえ、こんどこそは、おれたち四人、しつかり盗人根性になつてさぐつてまいりました。釜右エ門は金の茶釜のある家を五軒みとどけました。海老之丞は、五つの土蔵の錠をよくしらべて、曲がった釘一本であけられることをたしかめますし、大工のあつしは、この鋸でなんなく切れる家尻を五つみてきましたし、角兵衛は角兵衛でまた、足駄ばきでとびこえられる塀を五つみてきました。かしら、おれたちはほめていただきとうございます。」
と鮑太郎が意気こんでいいました。しかしかしらは、それに答えないうで、

「わしはこの仔牛をあずけられたのだ。ところが、いまだに、とりにこないのよわつてるところだ。すまねえが、おまえら、手わけして、あずけていった子どもをさがしてくれねえか。」

「かしら、あずかつた仔牛をかえすのですか。」
と釜右エ門が、のみこめないような顔でいいました。

「そうだ。」
「盗人でもそんなことをするのでござえますか。」

「それにはわけがあるのだ。これだけはかえすのだ。」

「かしら、もつとしつかり盗人根性になつてくだせえよ。」

と鮑太郎がいいました。

かしらは苦笑いしながら、弟子たちにわけをこまかく話してきかせました。わけをきいてみれば、みんなにはかしらの心持ちがよくわかりました。

そこで弟子たちは、こんどは子どもをさがしに行くことになりました。

「草鞋わらじをはいた、かわいらしい、七つぐれえの男坊おとこぼう主ずなんですな。」

とねんをおして、四人の弟子はちつていきました。かしらも、もうじつとしておれなくて、仔牛こうしをひきながら、さがしにいきました。

月のあかりに、野茨のいばらとうつぎの白い花がほのかにみえている村の夜を、五人のおとなの盗人ぬすびとが、一ぴきの仔牛をひきながら、子どもをさがして歩いていくのでありました。

かくれんぼのつづきで、まだあの子どもがどこかにかくれているかもしれないというので、盗人たちは、みみずの鳴いている辻堂つじどうの縁えんの下や柿かきの木の上や、物置の中や、いいにおいのするみかんの木のかげをさがしてみたのでした。人にきいてもみたのでした。

しかし、ついにあの子どもはみあたりませんでした。百姓ひやくしやうたちはちようちに火を入れてきて、仔牛をてらしてみたのですが、こんな仔牛はこのあたりではみたことがないというのでした。

「かしら、こりや夜つびてさがしてもむだらしい、もうよしましよう。」

と海老えび之丞のじやうがくたびれたように、道ばたの石に腰こしをおろしていいました。

「いや、どうしてもさがし出して、あの子どもにかえしたいのだ。」

とかしらはききませんでした。

「もう、てだてがありませんよ。ただひとつのことであるてだては、村役人のところへうったえることだが、かしらもまさかあそこへはいきたくないでしょう。」

と釜右エ門かまえもんが言いました。村役人というのは、いまだいえば駐在ちゆうざい巡査じゆんさのようなものであります。

「うむ、そうか。」

とかしらは考えこみました。そしてしばらく仔牛こうしの頭をなでていましたが、やがて、

「じゃ、そこへいこう。」

といました。そしてもう歩きだしました。弟子たちはびっくりしましたが、ついていくよりしかたがありませんでした。

たずねて村役人の家へいくと、あらわれたのは、鼻の先に落ちかかるように眼鏡をかけた老人でしたので、盗人たちはまず安心しました。これなら、いざというときに、つきとばしてにげてしまえばいいと思っただけであります。

かしらが、子どものことを話して、「わしら、その子どもを見失って困っております。」といいました。

老人は五人の顔をみまわして、「いっこう、このあたりでみうけぬ人ばかりだが、どちらからまいった。」とききました。

「わしら、江戸から西の方へいくものです。」
「まさか盗人ではあるまいの。」
「いや、とんでもない。わしらはみな旅の職人です。釜師や大工や錠前屋などです。」

とかしらはあわてていきました。

「うむ、いや、変なことをいってすまなかつた。お前たちは盗人ではない。盗人が物をかえすわけがないので。盗人なら、物をあずかれば、これさいわいとくすねていってしまうはずだ。いや、せつかくよい心で、そうしてとどけにきたのを、変なことを申してすまなかつた。いや、わしは役目から、人を疑うくせになつていないのじゃ。人をみさえすれば、こいつ、かたじけなくすりじやないかと思ふようなわけさ。ま、わるく思わないでくれ。」

と老人はいいわけをしてあやまりました。そして、仔牛はあずかつておくことにして、下男に物置の方へつれていかせました。

「旅で、みなさんおつかれじやろ、わしはいまいい酒をひとびん西の館の太郎どんからもらったので、月をみながら縁側でやろうとしていたのじゃ。いいところへみなさんこられた。ひとつつきあいなされ。」

ひとのよい老人はそういって、五人の盗人を縁側につれていきました。

そこで酒をのみはじめましたが、五人の盗人とひとりの村役人はすっかり、くつろいで、十年もまえからの知りあいのように、ゆかいに笑ったり話したりしたのでありました。

するとまた、盗人のかしらはじぶんの眼が涙をこぼしていることに気がつきました。それをみた老人の役人は、

「おまえさんはなき上戸とみえる。わしは笑い上戸で、なっている人を見るとよけい笑えてくる。どうかわるく思わんでくだされや、笑うから。」
とって、口をあけて笑うのでした。

「いや、この、涙というやつは、まことにとめどなく出るものだね。」

とかしらは、眼をしばたきながらいいました。

それから五人の盗人は、お礼をいって村役人の家を出ました。

門を出て、柿の木のそばまでくると、何か思い出したように、かしらが立ちどまりました。

「かしら、何かわすれものでもしましたか。」

と鉤太郎がききました。

「うむ、わすれもんがある。おまえらも、いっしょにもういっぺんこい。」

とって、かしらは弟子をつれて、また役人の家にはいっていきました。

「ご老人。」

とかしらは縁側に手をついていきました。

「なんだね、しんみりと。なき上戸のおくの手が出るかな。ははは。」

と老人は笑いました。

「わしらはじつは盗人です。わしがかしらでこれらは弟子です。」

それをきくと老人は眼をまるくしました。

「いや、びっくりなさるのはごもつとです。わしはこんなことを白状するつもりじゃありませんでし

た。しかしご老人が心のよいお方で、わしらをまっとうな人間のように信じていてくださるのをみては、わしはもうご老人をあざむいていることができなくなり
ました。」

そう言つて盗人のかしらはいままでしてきたわるい

ことをみな白状してしまいました。そしておしまいに、

「だが、これらは、昨日わしの弟子になつたばかりで、まだ何もわるいことはしておりません。お慈悲で、どうぞ、これらだけはゆるしてやってください。

い。」
といたしました。

つぎの朝、花のき村から、釜師と錠前屋と大工と角兵エ獅子とが、それぞれべつの方へ出ていきました。

四人はうつむきがちに、歩いていきました。かれらはかしらのことを考えていました。よいかしらであったと思つておりました。よいかしらだから、最後にかしらが「盗人にはもうけつしてなるな。」といったことばを、守らなければならぬと思つておりました。

角兵エは川のふちの草の中から笛をひろつてヒヤラヒヤラと鳴らしていきました。

四

こうして五人の盗人は、改心したのでしたが、そのもとになつたあの子どもはいったいだれだったのでしよう。花のき村の人びとは、村を盗人の難からすくつてくれた、その子どもをさがしてみたのですが、けつきよくわからなくて、ついには、こういうことにきまりました、——それは、土橋のたもとにむかしからある小さい地蔵さんだろう。草鞋をはいていたというのがしようである。なぜなら、どういふわけか、この地蔵さんには村人たちがよく草鞋をあげるので、ちようどその日も新しい小さい草鞋が地蔵さんの足もとにあげられてあつたのである。——というのでした。

地蔵さんが草鞋をはいて歩いたというのはふしぎなことですが、世の中にはこれくらいのふしぎはあつてもよいと思われます。それに、これはもうむかしのことなのですから、どうだつて、いいわけです。でもこれがもしほんとうだつたとすれば、花のき村の人びとがみな心のよい人びとだつたので、地蔵さんが盗人か

らすくつてくれたのです。そうならば、また、村とい
うものは、心のよい人びとが住まねばならぬというこ
ともなるのであります。

「花のき村と盗人たち」

※底本 新装版 新美南吉童話集3 『花の
き村と盗人たち』(2012年・大日本図書)

※このテキストを個人的に読む以外の利
用をされる場合には、新美南吉記念館まで
ご連絡ください。(TEL: 0569-26-4888)